



中高一貫の6年間で 学力と人間関係を育む

下館一高附属中学校の挑戦

県立の中高一貫教育校として、今年度開校した下館第一高等学校附属中学校。新型コロナウイルスによる休校もようやく明け、通常の授業が始まっています。

新しい学校運営に携わる教頭の木村厚夫先生と学年主任の松下興大先生にお話を伺いました。

開校から振り返って苦労したことはありますか

木村教頭：4月に、40人の新入生を迎え、開校宣言と入学式を行いました。4月末には新型コロナウイルスのため休校となってしまいました。生徒同士の人間関係づくりが心配でしたが、一人に一台貸与したタ



たけだ かつのり 武田 勝義 さん(門井)

下館一高創立100周年まであと3年。私も中学生の成長がとても楽しみです。



高校生と今後の学校行事について活発に話し合う中学生

ブレットによるオンライン授業では、想像以上に活発なコミュニケーションを取ることができたことに驚いています。

松下先生：生徒の学習意欲や目的意識が高いと感じます。新しい学校をみんなで作り上げていく喜びがあるのでしょうか。オンラインで双方向のコミュニケーションをとり、信頼関係を築き、学級委員長まで決めることができました。学校再開に向けて、助走をつけることができたと感じました。

附属中学校の特色は

松下先生：学校行事や学校生活などは、市内の中学校と変えているところはありますが、高校生と一緒に学校生活を送るので、「高校生になった自分」というものを想像しやすい環境にあると思います。また、校則も下館一高のルールに準じているので、自由な雰囲気があります。細かい決まりはなく、最低限のルールしか定めていません。登校中の買利物

についても、自分たちでどうするか考えてもらっています。大切なことは、なぜルールがあるかです。その点をよく考え、「地域の人への気配りを大切にして買利物をすること」と自分たちでルールを決めています。自分で考え、気づけるのが、附属中の特色だと思います。

後期授業の展開など、どのように考えていますか

松下先生：社会で生き抜く力を育てていきたいと考えています。令和2年度に県内で開校した附属中学校5校が連携し、「地域の魅力発見！遠隔de5校交流」と題した「探究プロジェクト」を実施しました。本校の生徒は筑西市の自然や産業を調べ、



オンラインで生徒と向き合い授業を行う様子

地域の魅力や課題を発表しました。活動の中で、高校の先生と中学生の相性が良いのも発見でした。専門の知識が豊富な高校の先生に、中学生が質問で入り込んで行く姿が多々見られるのが、中高一貫校の強みです。

取材を終えて感じたこと

オンライン授業で学習の成果を出したことで、良い人間関係を築けたことは、素晴らしい言葉しかありません。先生の努力が実を結ぶこと、中学生の知的好奇心が満たされることを楽しみに応援していきます。

夢や希望を かなえる学校



あかたに きよひろ 赤田部 清浩 校長

附属中のキャッチフレーズは、「想像を超える自分に出会える学校」です。高校を卒業する6年後の自分がどうなっているかを想像するのは難しいですが、きっと想像を超える自分になっているのではないのでしょうか。そんな学校生活を私たちと一緒に過ごしてみませんか。

私たちは生徒たちの未来を、そして夢の実現を応援します。